《コロナ禍の記録》

令和三年度卒業生総代謝辞（午後の部）

島野　蘭
（文学部英語英米文学科）

本日は、私達卒業生・修了生のためにこのような盛大な式を催していただき、誠にありがとうございます。またご臨席を賜りました佐々木学長をはじめ、日髙総長、松木理事長、ご来賓の皆様方に、卒業生一同心より御礼申し上げます。

四年前、私達は今と同じ日本武道館で入学式を迎え、専修大学に入学しました。高校生活以前とは全く異なる環境への期待と不安の入り混じった気持ちで始まった大学生活は、沢山の出会いがあり、さまざまな経験をし、そして多くのことを学んだ四年間でした。

私は、英語英米文学科で英米文学を学んできました。ある授業で英語学習者としての自覚と英語使用者としての自覚の違いの話を聞きました。英語英米文学科の授業では文学をはじめ、英語四技能を網羅しており、上級生や下級生、卒業生、留学生などとの交流も豊富にあり、さらに英語を使って世界のさまざまなことについて考える機会が沢山あり、私はこの四年間で、英語学習者としてだけでなく、自分は生活の中で英語を使っているという英語使用者としての自覚を得ることができました。そして、自分の周りのことだけでなく、世界の一員として、物事を広く考えようとするようになりました。

私達の四年間の大学生活のうち半分は、新型コロナウイルスの影響で、入学前に想像していたものとは全く異なるものになりました。授業はオンラインになり、キャンパスに通うことができず、友達に会ったり、先生方に相談することが難しくなり、授業や課題の進め方などでも苦労しました。そして沢山の時間をかけて選んだゼミナールも最初からオンラインで始まり、しばらく直接顔を合わせることができませんでした。また、進路に関わる活動も例年と異なる進め方となり、誰もが進路に大きな不安を抱いていたと思います。そのような中でも、「コロナのせいでできなかった」と後悔しないように、また大学生活をできるだけ実りのあるものにしようと努力し、工夫を凝らして、進路活動も乗り切りました。対面授業が再開された際には、友達や先生方に直接キャンパスで会うことができるありがたみを再確認することができ、時間を大切に過ごすことができました。

令和３年度卒業式（午後の部）総代・島野蘭さん

ゼミナールの中で、何年後と具体的な時期を決めて、自分のその時の様子を、具体的に想像して、未来形ではなく現在形で話し、それを録音して、一週間毎日聞くという課題がありました。現在形で、具体的に自分の本当にやりたいことをやっている姿を一週間毎日想像することで、その夢を実現するために自分が今やらなければいけないことを考えるきっかけになり、また、そのための努力へのやる気が向上しました。

新型コロナウイルスは次々に変異株が誕生し、いまだに、終息の兆しが見えません。これにより私たちを取り巻く環境は常に変化し続けていますが、専修大学生としての四年間で培った沢山のことを忘れずに活用して、自分達のやりたいことに向かって、これから何ごとにも負けずにいっそう精進していきたいと思います。

最後になりましたが、今まで親身になって指導していただいた

先生方、さまざまな場面で支援してくれた職員の方々、いつも全力で支えてくれた保護者の方々、そして苦楽を共にした仲間たちに、卒業生・修了生を代表して御礼を申し上げます。そして、我々の母校となる専修大学の更なる発展を祈念し、謝辞といたします。

令和四年三月二十二日